

梅原 薫子（うめはら・くんし）

1、プロフィール

明治の青森市俳壇に木村横斜の影響下に登場、河東碧梧桐の新傾向にも走らず、子規の句風を守った。横斜の没後、遺稿集刊行に尽力し、晩年は「十和田」の手古奈と交流した。

<生没>

1876(明治9)年 月 日～1958(昭和33)年4月28日

<代表作>

雪三度降りて鮎来たりけり(明治35年)

萱刈の離ればなれに浮き沈み(昭和6年)

<青森との関わり>

若くして仙台から青森に来て歯科医を開業し、県歯科医師会長もつとめた。

2、作家解説

明治9年仙台生まれ。本名稔。32年青森市に歯科を開業。

木村横斜・久保小琴・斎藤蓀葉・一戸其烏らの俳会に入る。前二者の住家を斜琴庵と呼び句会の場とした。会の名は不来会、後に烏鷺会と改称された。

弘前太平会の横斜が東奥日報に入ると、文化面が活気を呈した。記者が俳人という好例である。友人の閑村・小琴・笛秋もその例である。

薫子は横斜と同座し、同行して俳歴を重ねた。県都の俳人は異動が多く、34年の小琴(上京)蓀葉(秋田)、35年其烏(秋田)の離青に、35年の閑村、野辺地青年葦水の来青、小琴の早々のUターンに一憂一喜した。俳壇不振、「寂然」という評がよくみられるのは、俳人の離青に関係し、実態も示すが仲間の少ない不安も象徴していた。不来会はその心理の洒落だった。

35年県俳壇振興策として野辺地の山口鶯子から十句集提案があった。新聞出題、幹事の句集化、投句者回覧・入点という煩瑣な方法に対し、横斜は永続すま

いと危ぐしたが、結果はその通りであった。横斜は成否は土壌の問題と婉曲に言ったが、熱心バカがない地方性をいったのである。彼は閑村や薫子にそれを希ったらしい。別の面で潤活油的働きをしたのは、世渡り下手の俳人の就職・転職を援助するとか、亡き横斜(大正 15 年没)の遺稿編集刊行をするなどの功績を残した。横斜は県の中心的俳誌のないのを遺憾とし、秋田の五工から横斜の怠惰を批判されると「俳星」の理想高壮の半面の趣味狭隘を衝いた。彼には 35 年壮絶な死を遂げた子規の風を慕う情強く、露月の堅実、碧梧桐の新風共に追随する気はなかった。39,40 年の碧梧桐来青に当たり薫子が動かなかったのは師に従ったのであった。

日露戦争と 43 年の青森大火は大きな傷跡を残した。

大正初の古男会は明治俳壇の一決算であり、大正 4 年の俳壇評は同会にまず敬意を表し、次で虚子派、碧派、乙字派と俳人を分類して新時代の動静を示した。